前回の幼児期までのこどもの育ち部会（７月28日：第５回）での主な御意見

※　　議事録をもとに、事務局の責任において作成

＜１．社会全体の意識転換を主導するよう基本的な指針の策定に向けた検討＞

＜１－１＞　インクルーシブ教育・共生社会の重要性

・保護者自身がインクルーシブ教育を受けていないというのが非常につらいと実感しており、インクルーシブ教育を進めていく中で育ってきたこどもたちが将来的に親となり、保護者になっていくと、いい好循環が生まれていくのではないか。
・保護者同士の関わりの中で、障害児を持つ保護者同士だけではなく、全ての保護者が障害児を持つ保護者と関われる機会を増やしていくというのが必要。
・インクルージョンを進めていく上で受皿をつくっていくことはとても大事。
・障害の子に限らず、１クラスの人数を20人ぐらいにして、そこに教科の先生、支援の先生、外部派遣の先生というような方向を日本も目指していけたらいい。
・障害児相談支援はどの段階から介入できるか、早期の寄り添いが必要。
・共生社会の原点となるのは乳幼児の社会の在り方。幼児期に育つ社会情動的スキル、とりわけ人間関係の構築をするときなので分け隔てない、お互いに尊重し合う関係は非常に重要。
・インクルーシブ教育は共生社会に向けていくという目標はみんな一緒。それぞれの施設や環境の中でシステムをつくり上げて、その向上を目指していくという方向性が非常に大事。
・障害の類型みたいなものに当てはめてしまうのではなくて、こどもの強みとか持ち味を生かして、周りの接する人がそれを伸ばす方向へ持っていくような捉え方をしていくことが大事。
・障害は特別ではないインクルーシブの視点が大切。発達をこれまでのいわゆる発達段階みたいなものとは違った発達の描き方が大事。
・インクルーシブ教育はもっと抜本的な改革を盛り込んでいかないといけないと感じ、違いと言うのがどれだけすばらしいことで、どういうふうに対応していけばいいのかは、小学校以降もすごく重要であり、保育園からこういった体制や、人員確保を真剣に捉えて仕組みを作っていかないといけないのではないか。
・こどもは一人一人個性があって強みがある。育ちも千差万別で、普通、標準はない。そうした多様性が尊重されて、こどもの願いが受け止められるためには、保護者・養育者たちが、こどもに対する見方をリフレーミングする作法を理解しておく必要がある。こどもの強みや持ち味を見つけて、それを伸ばせるように周囲の接し方や環境を

変えていく。こどもを変えようとするのではなくて、周囲が変わろうとすることが大事。それにより、周囲から認められる、受け入れられているという安心感を持てるようになる。それがこどもの育ちに必要な愛着を生み出して、自分らしく生きていく、人生のウエルビーイングにつながる。

・多様なこどもの子育ちと子育てについて、社会的な価値づけをするということが非常に重要。子育て自体もそうですけれども、経済中心で効率主義の世の中とかと、子育て、例えば障害のあるこどもとの生活というのが相入れない関係にあるということが非常に大きな問題を生んでいる。例えば幼児教育の成果というのを税収が増加するからという論理で生産性や成果主義の議論にするのは危険。

・全ての人が豊かに暮らすということを社会的に価値づけていく必要がある。全ての人が社会を構成する大切な一員であるということが認められる、その人らしい参加の仕方を協働的につくるような社会を目指すということを国として発信していくということが本会の役割。地域を動かしていくということを具体的に考えていかなくてはならない。

・児童精神医療は行政が取り組むべき政策医療であり、ソーシャルワークである。周りの環境を整えて、いろいろな幸せの形を理解して、それを手助けすることで、うまくいかなかった人間関係、学習にも取り組みやすくしたり、あるいは家族との関係をよくすることで充実した生活に導いていく。できないことへのフォーカスではなくて、やりたいこと、個性・強みにフォーカスし、循環させていくという考え方。

・こどもの強み・持ち味の発見と具体的な対応を支援する信頼できる専門人材が必要。地方自治体は、こどもの育ち、こどもと社会とのつながりを支えるファシリテーター役で、信頼できる専門人材は絶対に必要。

＜１－２　「身体」「心」「社会（環境）」のすべての面での育ちを一体として保障＞

・我が国の乳幼児死亡率、妊産婦死亡率は、ともに世界で最も低い。しかしながら、妊産婦の自殺率は高く、心中以外の虐待死のうち、０歳は65.3%と大きく占めているというのが現状。健康に影響を与えるのは非医学的な要因であり、社会的要因が重要であることはWHOや米国保健福祉省において既に指摘されており、エビデンスに基づく政策決定が国際的に進められている。

・健康は病気がないということではありません。国際生活機能分類ICFにおいても、健康状態は身体・心理・社会の相互作用によってもたらされるもの。

・乳幼児期のこどもには、食べたい、寝たいという身体、それから、構ってほしい、愛されたいなどの心、多様な人や社会と関わる社会、身体・心理・社会の要素が散りばめられています。特に「遊びたい」はこどもの育ちにおいて身体・心・社会を全部網羅する重要な要素。

・地域に暮らすこどもと家庭には様々な問題がありますが、医療が健診や診療、相談の

場で把握できることは一部であり、心理・社会面への目配りが求められる。
・身体・心理・社会にわたる複眼的な視点で対応することで、多職種が気づいた問題を集約・整理し、適切な対応や効果的な支援につながることのできる方策を確立することが喫緊の課題。
・地域に設置されている妊産婦や乳幼児の保護者を支援する子育て包括支援センターと、虐待や貧困などの問題を抱えたこどもや保護者を支援する子ども家庭総合支援拠点の連携が不十分であることから、切れ目なく支援するために、身体・心理・社会面への目配りが必要で、こども家庭センターに係る制度にも当部会が掲げる身体・心理・社会の明文化をすることが必要。
・質の高い支援をこどもの成長と発達に即して切れ目なく提供するためには、専門職が共通言語としてバイオサイコソーシャル、身体・心理・社会という視点を持つことが有用。社会全体の全ての人に身体・心理・社会の視点を切れ目なく共有してもらいたい。
・各年齢に対してバイオサイコソーシャルの視点が重要。その視点を一人一人に把握していくことが、こどもの成長、発達の見通しに繋がり、また、課題への支援の手助けにもなる。そのため各年齢あるいは園、学校におけるバイオサイコソーシャルの視点の研究が必要。

＜２．基本的な指針で示す理念や考え方を具体的に実現するための方策の検討＞

＜２－１＞　多職種協働、共通言語の必要性
・多職種協働の共生保育が実現できるシステムをつくらなくてはならない。『基本的な指針』が目指すものは、多様なこどもがそのままを受け止められる共生保育を全ての保育施設で当たり前に実現すること。今、生活している地域で必要な支援を受ける、選択肢を当たり前に持つことができるという社会を目指すためには、やはり多職種協働の地域連携システムが必要。
・乳幼児期にこそ、幼稚園に限らず、様々なこどもを受け止める専門職が連携してこどもと保護者を継続的に支えることが実現されるシステム、こども家庭センターが全ての園で多職種協働を可能とするような地域での連携協働システムを支える、そういったところになっていく必要がある。
・多職種連携の話がやはり大きなテーマだということが見えてきている。その中で、体制や、共通言語をどのように共通にしていくのかということがとても重要。

＜２－２＞　家族支援の重要性
・障害のあるなしにかかわらず、実は家族を支援するというのはとても大切なことであり、さらに言うと、幼児期までという限定したものではなく、小学校以降、そして、思春期も含めて、こどもまんなか社会を目指していくというのであれば、家族はずっと

そこの支援の中にあっていい。
・こどもに対してのアセスメントやアプローチだけをしていても、家族のアセスメントとその支援をしないと、カウンセラー、支援者が離れるとまた元の悪い状態に戻ってしまうなんていうことが多々あったので、ここを何か社会の一つの問題提起として取り上げていくのもいい。
・家族療法的なシステムズアプローチの視点を、今回は障害のというところの文脈ではあったけれども、全ての家庭においてどのような支援ができるか。当然、それにひもづいてどのような専門人材を育てていくかという議論につながっていけばすばらしい。
・家族の支援、周囲でも特にこどもは一番近いのは家族ですから、家族の支援が不可欠。
・生きづらさというのは本来周りが変わればないはずだと思っているので、乳幼児期のこどもに一番近い家族支援、もっと広がって地域全体、社会全体、国全体の環境調整をするということが大事。

＜２－３　その他＞

・母子保健を含めて、こどもに関することは非常に市町村の役割が重要。
・親になる前の教育だったり、子育て体験という部分、アウトリーチ型でやっていかないといけないことも改めて強く認識する必要がある。
・こどもを真ん中に置いた社会のつくり方というのは、周囲のこどもとの関係の在り方の問題なのだという視点がすごく重要。こども一人一人のよさとか個性をどう大事にするか、障害があるなしにかかわらず、全ての子、結果的に大人に対しても同様の視点は、指針にも記述したい。
・全て関わりの中で問題や生きづらさというのは生まれてくるので、本人が生きづらさを持っているわけではなくて、関わりが全て。
・家庭的保育は、地域との関係が深く、施設での保育だけでなくて多くの方々に理解をいただくためには、地域との関係とか地域の理解というところがとても大事。
・養育者からお子さんのことをどう理解したらいいのか、本当に泣いてしまったらどうしたらいいのかという戸惑いの声は、地域子育て支援拠点でも同じように把握しており、中学生ぐらいからこどもたちと触れ合うことを仕組み化していくことが大事。